

水平線③【院長コラム 2025 年 12 月】

【常識非常識、今むかし】

40 年以上医者をしていると、その頃当たり前だったことが今は非常識となっていたり、またその逆のことにも遭遇する。

例をひとつ紹介しよう。外傷の処置である^(※)。昔は傷を滅菌された生理食塩水で洗い、イソジン（ポピドンヨード）と呼ばれるこげ茶色の消毒液でゴシゴシと傷をこすっていた。そして傷の縫合に太い絹糸やナイロン糸を使った。しかし現在は傷を洗うのに使うのは石けんと水道水だ。そしてガーゼで水分を拭き取り、自然に消える糸（吸収糸）で傷の内側を縫い合わせてテープをはってお終いとなるか、縫わずにテープのみということもある。たとえば皮膚を縫い合わせるとしても、髪の毛のような極細のナイロン糸だ。

だから、以前はムカデのような傷跡がケガの証しであったのが、今は傷跡が目立たないか、ほとんどわからなくなっている。ブラックジャックの顔はもう古いのだ。そして傷の感染も格段に少なくなった。昔の人から言えば水道水で傷を洗うのは、縫合しないのは何事かということになるが、これが理論と経験に裏打ちされた医学の進歩なのだろう。

このようなことは他にも多くあるが、面白いことに昔行われていたことが一旦否定されたものの、再び脚光を浴びるということもある。医学の道は果てしない、と思うとともに、インターネットテクノロジーが席卷している現在の一般社会にも似たことがあるだろうなと感じている。

^(※) 処置は外傷の程度によって異なります